

経済情報ピックアップ

2月

◆2013年中の国際収支状況

- 2/10日、財務省が2013年中の「国際収支状況（速報）」を公表しました。日本国内と海外との総合的な取引状況を表す「経常収支」は、3兆3,061億円の黒字、前年に比べ▲31.5%と3年連続で黒字幅は縮小し、1985年以降最少となりました。日本の居住者と非居住者との間の賃金・給与、金融資産から生じる利子、配当金等の収支を表す「所得収支」は、黒字幅を拡大したものの、物の輸出入の収支を表す「貿易収支」の赤字幅が拡大したことが効いています。
- 内訳をみると、「貿易収支」は、▲10兆6,399億円の赤字、前年に比べ▲4兆8,258億円、赤字幅が拡大しました。3年連続の赤字で、1985年以降では既往最大の赤字額です。円安の進行の割には輸出数量が伸びず、いわゆる「Jカーブ効果」（当初は円安による輸入価格の上昇で貿易収支赤字は拡大するものの、時間がたてば輸出採算の好転で競争力が回復し、徐々に輸出数量が増えて貿易赤字が縮小する）が想定どおりに出てきていない状況にあります。
- 輸出は、66兆9,694億円と、前年比+5兆5,273億円、+9.0%増加しました。前年比では3年振りの増加となります（前年は▲2.0%減）。なお、1/30日に財務省が公表した、通関ベースの2013年中の貿易統計によれば、金額ベースでは、米国（前年比+15.6%）、中国（同+9.7%）向け等が自動車を中心に増加したこともあり、輸出全体で+9.5%増加しました。もっとも、数量ベースでは、▲1.5%と3年連続で減少しました。これは、新興国・資源国経済の回復が鈍かったほか、日本企業の現地生産化が進んだという構造的要因によるものと考えられます。
- 先行き、輸出は、新興国・資源国経済の緩やかな回復に伴い、次第に増加してくるものと思われそうですが、日本企業の海外生産シフトに伴い、円安に伴う数量増加は生じにくい経済構造に変化してお

り、増加テンポは鈍いものと考えられます。

- 一方、輸入は、77兆6,093億円と、前年比+10兆3,532億円、+15.4%増加しました。前年比では4年連続の増加となります。輸出と同様に、通関ベースの2013年中の貿易統計をみると、輸入（金額ベース）は全体で+15.0%増加しており、地域別には、中国（同+17.4%）、中東（同+15.7%）等が増加しました。また、商品別には、原油（同+16.3%）、液化天然ガス（同+17.5%）、半導体等電子部品（同+37.4%）等が増加しました。数量ベースでも+0.4%と4年連続で増加しましたが、原油（▲0.6%）、液化天然ガス（+0.2%）いずれも、輸入数量は伸びておらず、燃料の輸入増加は、ドルベースの価格上昇と円安に伴う円換算の上昇によるもの（原発稼働停止の影響は前年比では出尽くし）と言えます。また、半導体等電子部品のほか、通信機（スマートフォン等）、一般機械、自動車、衣料・同付属品等の輸入が増加しており、日本国内景気の回復に伴う企業生産・消費活動の活発化が輸入増をもたらしています。
- 先行き、輸入は、日本経済が消費税率引上げに伴う駆け込み需要とその反動の影響を受けつつも、基調的には緩やかな回復を続けていくとみられることから、原燃料、部品の輸入が増加を続けると考えられます。原発が稼働再開しなければ、貿易収支の赤字は当面続くものと予想されます。
- 輸送、旅行、金融手数料、特許等使用料等のサービス取引の収支を表す「サービス収支」は、▲1兆5,950億円の赤字と、前年に比べ+8,950億円、赤字幅が縮小しました。訪日外国人旅行者数が大きく増加したことが効いています。
- 「所得収支」は、16兆5,318億円の黒字と、前年に比べ+2兆2,595億円、+15.8%黒字幅が拡大しました。3年連続の黒字で、1985年以降では、既往最大です。国内企業の直接投資による配当金や海外子会社収益の受取増加に加え、証券投資による債券利子等の受取増加等によります。
- 先行き、所得収支は拡大を続けると想定され、経常収支の赤字化定着は回避できると考えます。（筑波総研チーフエコノミスト 渋谷康一郎）